園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2026年7月

認めれば現れ、見つめれば拡大する

●先日、主任の工藤先生の発案により、月に一度行われる職員会議の時間を使って職員ワークを行いました。内容は「同じチーム内のメンバー全員の良いところをその場で考え、伝え合う」というものです。



●このワーク、何も職員同士の親睦やヨイショし合いを目的としたものではありません。そこには保育の質向上に絡めた真剣なねらいがありました。ただ、実際に行ってみると、なんともハートウォーミングで学びの多い時間となりました。今月のコラムでは、その取り組み模様についてご紹介させていただきます。

※今回のワークで発表された各職員の良いところをまとめた PDF ファイルをルクミーのおたよりに添付しています。職員同士でお互いをどう思っているかがわかる資料となっていますので、よろしければご覧ください。

職員ワーク「先生たちの良い所を考えてみよう！伝えてみよう！」



●ワークでは、まず初めに 5 分間のシンキングタイムを設定し、自分が所属するクラスや給食室、事務所内の会議に参加しているメンバー全員の良い所を各自ワークシートに思いつくままに挙げていきました。その後は一人ずつ発表タイムを設け、自分が思うそれぞれのメンバーの良いところを順番に伝えていきました。

●当たり前のことですが、同じチームのメンバーとは毎日顔を合わせながらも、各々は忙しなく仕事をしています。コミュニケーションをとる内容というのも、あくまで仕事上の話がほとんどです。それゆえ今回のようにお互いの長所を伝え合うような事に慣れている職員の方が少なく、それぞれのメンバーから自分に対する思いが発表される度に、照れくさいような、嬉しいような、何ともむずがゆい表情を浮かべる職員が多かったのが印象的でした。

ワークの2つのねらい

●さて、冒頭述べたように、このワークには主に 2 つのねらいがありました。

●1つ目のねらいは「考える練習」です。「〇〇先生の良いところを一つ教えて」という質問であれば、回答はさほど難しくありません。しかしその対象をメンバー全員と広げ、かつ制限時間内にポンポン挙げてくださいとなると、思っていた以上に頭脳をフル回転させる必要があります。

●実際にワークに臨んでいる職員の様子を観察したところ、メンバーそれぞれの長所をワークシートに書く手がずっと止まらない職員もいれば、中にはペンがなかなか動かず必死に絞り出しているような職員の姿もありました。

●では、両者の差は何なのでしょう。考える力の差なのでしょうか。私はそうではなく、「観察力（見る力）」の差だと思っています。なぜなら、何かを考える上では判断材料としての事実や情報が不可欠であり、そのためには日頃から対象者へのアンテナを張り巡らせ、よく見ていなければ考えられないからです。**「相手の長所がすぐに思いつかなかったのは、相手のことをよく見ていなかったから――」**そんな感想を少しでも職員に持ってもらえたらこのワークは成功だと考えていました。

令和８年度ふかさわミル保育園事業計画は「3M」

●ところで、今年、ふかさわミル保育園は10周年を迎えました。今年度の事業計画には、原点回帰の意味を込め、園名にちなんで3つの「ミル」、子どもを丁寧にみる、やってみる、日々かえりみる、略して「3M（スリーミル）」を掲げました。

3M

丁寧にみる・やってみる・日々かえりみる

～みんなが笑顔になれる保育園～
ふかさわミル保育園

【背景】
- 新主任のスタートアップ
- 新人層の成長支援
- 中堅・リーダー人財のブレない軸づくり

①基本動作の徹底（もう一度原点に）

②保育の質と働きやすさの両立（目指せ都内No.1）

～みんなが笑顔になれる保育園～
ふかさわミル保育園

●目まぐるしく変化成長する子どもの興味と発達の今を捉え、適時適切な支援方法を考えるにあたっては、何よりも子どもの「今」をしっかりと観察すること（**みること**）が不可欠です。

●今回のワークの対象は職員でしたが、我々保育者にとって最も大切なのは、目の前の子ども一人ひとりに対して**アセスメント**（情報収集・分析・評価）ができることです。その上で一番大事な「**見る力**」を培うところに今回のワークのねらいがありました。今回のように長所を一人につき1個挙げることはさほど難しくなくても、これが10個、20個挙げるためには、対象を相当丁寧に観察しなければ出てきません。こうした子どもを丁寧に見る力を我々は養っていきたいと考えています。

子どもの気持ちを体験する

●ワークのねらいの 2 つ目です。それは、**自分の長所を認めてもらえた時の嬉しい気持ちを職員自身が体験すること**でした。ミルの保育士たちは、日常の保育の中で子どもの良いところ、得意な事、頑張っていることに気づいたら、そのことを褒める・認める言葉がけをたくさんするようにしています。そこで、ワークの中では反対に、実際に職員が他人から褒めたり認められたりすることで「そんな風に思ってもらえていたなんて嬉しい！」「それって、私の長所なんだ。」など、自分の長所に意識が向いていきました。そうすることで、今度はその長所を伸ばしたいという気持ちに繋がります。こうした一連の体験を通じて、子どもの気持ちを理解しました。

●今回のワークに参加したある職員は、次のような感想を述べています。

これまで私は、●●先生のように何でも冷静沈着に仕事をてきぱきこなせるような人になりたい。そうならねばならない。そんな風に考えていました。しかし、今回同じチームメンバーから告げられ

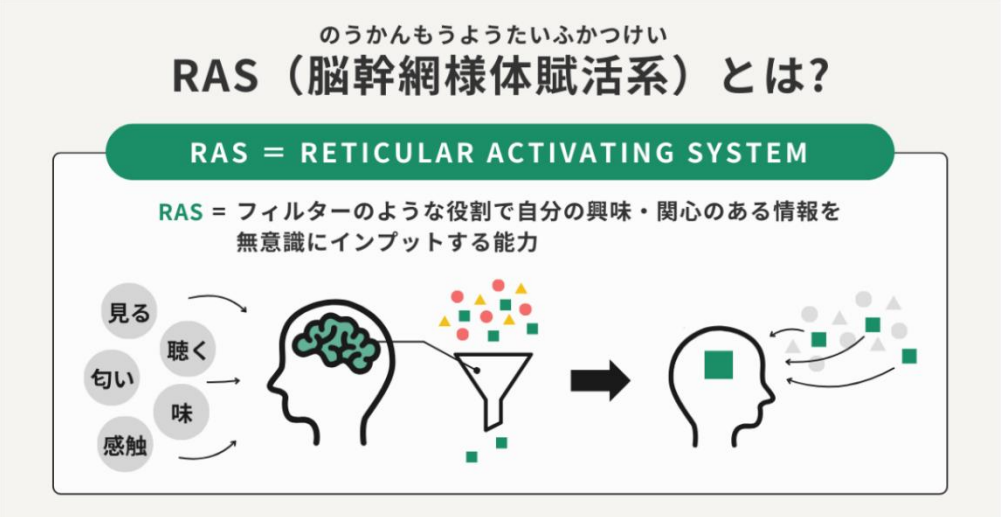
た自分の長所（いつも優しくポジティブで、寄り添ってくれる存在）を聞いた時、**私は●●先生のようにはなれないとしても、私の強みを大切にすることで誰かの役に立てているのかもしれない**という風に思うことができました。私は私でいいんだ、という、前向きな気持ちになれました。

認めれば現れ、見つめれば拡大する

●今回のワークを実施したことで、私は二つのことを思い出しました。一つは冒頭に書いた**「認めれば現れ、見つめれば拡大する」**という言葉です。子どもの長所に子ども自身の意識が向くことで、その長所を伸ばすための情報がどんどん集まり、長所が一層磨かれていく現象を表現したものです。これは、心理学では**「カラーバス効果」**や**「カクテルパーティー効果」**と呼ばれるものと同様です。例えば、車を買おうと決意した途端に、ひそかに買いたいと思っていた車種の車をやたら見かけるようになった、夫婦に子どもを授かったと分かった瞬間から、赤ちゃん連れの夫婦ばかりが目に飛び込んでくるようになった等、保護者の皆さんの中にもこうした経験をされた方は少なくないと思います。

脳の情報フィルター機能 RAS（Reticular Activating System）

●実はこうした不思議な現象は、脳の「RAS（網様体賦活系）」という情報フィルター機能からもたらされているそうです。脳のRASという仕組みが、自分にとって必要な情報か否かを無意識に取捨選択しているのだそうです。



●ここで注意しなければならないのは、この**RASはポジティブにもネガティブにも同じように働く点です**。だからこそ、乳幼児期の子どもに対しては**肯定的な声掛け**が重要になります。そして、その声掛け方も、ただやみくもに褒めればいいわけでなく、**子ども本人にとって納得感のある、(確かに)という、実感を伴う褒め方**をしなければRASにとっては効果がありません。子どもにとって実感を伴う褒め方としては、例えば製作を例にとると、出来上がった作品(**結果**)だけを褒めるのではなく、お友達と協力して最後まで作り上げたこと(**過程**)や難しい所も諦めずに集中していたこと(**姿勢**)を褒めること、また保育者自身の驚きと称賛の感情を「**私は**すごいと思う！」という風に伝えること(**アイ・メッセージ**)が大切です。結果そのものよりもプロセスや姿勢に注目し「ちゃんと見てたよー。すごいね！」と伝えること、それには、日頃から目の前の子どもの姿を具体的かつ丁寧に「見る」習慣が必要なのです。

手塚治虫の弱さと強みを見抜いていた母の言葉

●二つ目は、戦後日本の漫画界の第一人者、手塚治虫の母・文子氏の言葉です。以下幼児教室コペル社長大坪信之氏のインタビュー記事から引用します。

●手塚治虫の家庭は比較的裕福で、新しい物好きの父が収集した、当時は珍しかった漫画が本棚に並んでいたそうです。そのような環境も彼の才能を引き出した要因の一つだといえますが、それ以上に大きかったのが母の存在だと思います。

●例えば、軍人の娘として厳しい躾を受けて育った文子は、幼少期にいじめられっ子だった治虫に「堪忍(かんにん)しなさい」「我慢しなさい」と常に言い聞かせていました。後に治虫は、「癇癪持ちだった自分が大人になって何とか腹の虫を抑えることができたのは、母から教わった忍耐のおかげかもしれない」と言っています。彼の中で母の言葉がどれだけの重みを持って響き、心に長く残っ

ていたかがよく分かるエピソードです。

●それから、治虫が小学生の時、授業中に漫画を描いているのが先生に見つかり、怒られたことがありました。当時は漫画の価値が世間に十分認められておらず、市民権を持っていなかったのです。それで文子も学校に呼び出されて、漫画を描くのを止めさせるように怒られます。ところが、家に戻ってきた文子は、「どんな漫画を描いているのか見せてちょうだい？」と尋ね、治虫が持ってきたノートを何も言わずに最後までじっくり読み、こう言いました。

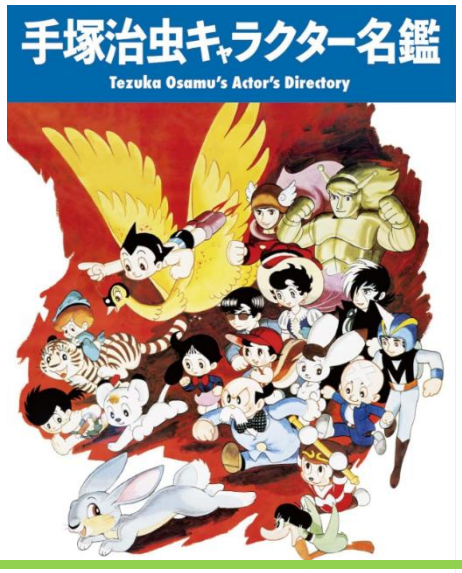
「治（治虫の本名）ちゃん、この漫画はとても面白い。お母さんはあなたの漫画の、世界で第一号のファンになりました。これからお母さんのために、面白い漫画をたくさん描いてください」。

おそらく、その文子のひと言がなかったなら、私たちが知っている手塚治虫はおらず、いまの漫画界も変わっていたでしょう。

（引用：雑誌「母」2022年　致知出版社）

●いかがでしたでしょうか。これこそ「認めれば現れ、みつめれば拡大する」の最たるものではないでしょうか。乳幼児期の子どもにとって、絶対的信頼に裏打ちされた身近な大人、とりわけ父母からのアイ・メッセージで伝えられたポジティブな声かけが、確実にその子どもの未来を方向付けるといっても過言ではないでしょう。それは同時に私たち保育者の責任の大きさを意味しており、身が引き締まります。

園長　橋本　英明





母と妹弟と（1941年ごろ/宝塚の写真館にて）
左から母・文子。妹・美奈子。治。弟・浩。